
夢に溶ける君の声。

カラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢に溶ける君の声。

【Nコード】

N2433B

【作者名】

カラス

【あらすじ】

それは突然の事故だった。少年は希望を、彼女を失った。しかし、彼女は夢の中で、少年の所に戻ってきた……

プロローグ

君の笑顔が僕を救ってくれた。

君を見てみると、心が安らいだ。

君さえいれば、他になにもいらなかった。

君こそが、僕のすべてだった。

でも君は、僕の前から消えてしまった。

僕は、なんのために生きればいいんだろう。

僕は、なにを糧に過ごせばいいんだ。

分からない。

分からない、分からない。

ある日、僕は夢を見た。

君の夢だった。

夢の中で、やっと君に会えた。

夢の中こそ、僕達の永遠だった。

夢の世界で……

伊月裕隆、高二的16歳。

僕は周りから言えば、不幸をいつきに背負った男らしい。

僕には、両親と兄と妹がいた。僕が4歳の時、母を病気で亡くし、父と兄を、僕が小学6年の時に、交通事故で亡くした。

さらに、今から半年前に、放火され、住んでいた家無くした。犯人はまだ捕まらない。そして、二ヶ月前、最愛の彼女を亡くした。事故だった。美紀は、僕に初めて希望を持たせてくれた。絶望して、絶望して、苦しんでいた僕に、手をさしのべてくれた。

でも、美紀は死んでしまい、僕の希望は、絶望に変わった。

それは突然だった。美紀は僕の元へと戻ってきてくれたのだ。夢の中だけど、はっきりと美紀の温もりを感じる。僕が眠りにつけば、必ず美紀は僕の元へ来てくれた。

僕の希望が、戻ってきたのだ。

「美紀、これからずっと一緒だよ」

僕がそう答えると

「ええ、ずっと一緒よ」

と言ってくれる。

夢の世界では、僕たちは永遠だった。

ピピピッピピッ！

目覚まし時計の音で、目が醒める。

どこにも美紀の姿はない……

「はあ……」

俺は、深いため息をはいた。夢から現実に戻る、この瞬間が一番辛い。

ドンドンッドンッ!!

誰かが、僕の部屋をノックする音が聞こえた。多分、明日香だろう。

「ひろく、起きてるく」

ほらな！明日香だ。

僕は、家が火事でなくなってから、僕が小さい頃から、お世話になっていた櫻井家にやっかいになっている。

家が火事になり、どうしていいか分からなくなって街をさまよっていた僕に、櫻井家のおじさんとお婆さんは

「なにも言わずに、家に来い」

と言ってくれた。

僕もその言葉に甘えて、おじさんの家で暮らすことにした。

明日香は、おじさん達の娘で僕とは小さい頃に、よく遊んだなかつた。明日香は、僕が家に来ることを喜んでくれた。

てつきり反対されると思っていたから、正直嬉しかったのをよく覚えてる。

そんな事を考えていたら、明日香が部屋に入ってきた。

「もお起きてるなら返事くらいしてよ！」

「悪い。」

「まだ、忘れられないの？」

明日香がなにを言いたいかは分かる。美紀の事だろう。

「なんの事だよ」

僕は答えずに返事をはぐらかした。

僕が答えたくないのが分かったのか、明日香はそれいじょう、追求してこなかった。

朝六時、私は目をさます。習慣とは凄いもので、私は目覚まし時計に頼らなくてもこの時間帯に自然に目がさめる。

とりあえず着替えて、キッチンで朝御飯の用意をしているお母さんの手伝いをする。

時計を見ると、そろそろ七時を回ろうとしていた。

「そろそろおこしに行くか！」

二階でまだ寝ている、裕隆をおこしに行く。ひろの部屋の前まで来ると、私は大きく深呼吸をする。

「ふう〜」

毎日、ひろをお越してるけど、やっぱり緊張する。

気持ちが落ち着くと、ドアをノックする。

「ひろ〜、起きてる〜」

返事はない。まだ寝てるのかな？仕方ない、起こしにいきますか！
ドアを開けて見ると、ひろはもう起きていた。

ひろは、あの時と同じ、美紀さんが死んだ時と同じ顔をしている。

私の嫌いな顔だ。人生に絶望してるかのような顔。

だから私は、少しでもひろが元気になるよう笑顔で、ひろに

「もう起きてるなら、返事くらいしてよ！」と言う。

ひろは

「悪い。」

って私に謝る。ひろはいつも、朝は暗い。私にはその理由が分からないし、教えてもくれない。

私にちよつとぐらい頼りにしてくれたっていいのに……

私には、思い当たるふしがあった。でも、言えない。言うのが怖かった。だって、もし私が言ってしまったら、ひろとの関係が崩れてしまいうさだから。

でも、それじゃ前に進めないよね。

だから私は思いきって聞くことにした。

「まだ、忘れられないの？」

でもひろは

「何の事だよ？」

ひろは答えてくれなかった。やっぱり私は、ひろの中じゃ少しも頼りにされてないんだね。そう思うと涙がでそうになった。

だから

「私、先にいっとくね。寝ちゃだめだよ！」
そう言って部屋をでた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2433b/>

夢に溶ける君の声。

2011年1月19日01時27分発行